始まる前に

佐藤紀子　カナダ

入院の三日目の夜半（よは）　眠りゐる夫の呼吸がふつと途絶える
「どこまでの治療を望んでいますか」とささやくやうにドクターが訊く
六十二年の結婚生活終はりたりたつた三日の入院の後
覚悟だけは決めゐし老々介護だが始まる前に終はりてしまふ
「亡き夫」と文字にする時俄かにも心にせまる夫の亡きこと
子らが抜け夫も抜けたる戸籍簿に私の名前だけが残りぬ

ひとり時間

佐々木　勢津子　福島

覚めぎはに隣りをさがすわが腕（かひな）ややあり夫亡きうつつに返る
一人分作り一人で食事してひとりで眠るこれからずうつと
南天の朱実しよぼしよぼ濡れてをりひとり遺されてふたたびの冬
せんべいの滓などこぼし茶を飲めりひとり時間のこのゆるゆるさ
「人生は涙と笑いでできている」流れくる歌詞が沁みるこの夜
干し柿を作るは俺の仕事だと陽だまりに柿を剝きゐし夫よ

女性の休日

宮内博子　埼玉

シニア割まであとわづか休日にむかふ渋谷のちひさなシアター
百席に満たぬシアター社会派の外国映画にをみな集まる
半世紀前アイスランドで起こりたる小さき革命〈女性の休日〉
休日はわれだけのものだらしなく過ごすひと日の長さを尊ぶ
重力に寄せられたるか谷底の渋谷交差点人いきれ満つ
賀状書く華やぎのなし喪をつたふるためのはがきは薄墨のいろ

遠来の友

上野隆紘　千葉

まだわれをしたひてくるる友ありて遠路を訪ひ来地酒を苞に
禿頭と白髪頭となり果ててかたみに驚くその老け様に
ひとまはりたがへど共に巳年にていたく気の合ふ広島の友
定年の後十年を世話になり頭上らぬ年下の友
めぐり歩くパワーなければ遠来の友を案内すわが散歩道
とりあへず米寿めざせと言ひ残し友は手をふる改札口に

わんこ席

椎名恵理＊千葉

犬連れの夫婦と呼ばれ二人分さしみ定食来るまでを待つ
浜焼きの網から炭に滴れる蛤のなかの海水白し
わんこ席ありますマークを探すことうまくなりたる助手席の夫
海鮮丼クラムチャウダー落花生ソフトクリームわんこは食めない
ハーネスがとれて自由を手に入れて犬は振り向く太平洋を
三度目の海に着きたる我が犬は四本足で踏みしめている

みだくなし

前田明　神奈川

人恋ふる夢から醒めてうつせみの命いとほし秋の風吹く
いちめんの大根畑のみどり葉が秋の陽に照る　なんていい日だ
「みだくなし」は不器量の意味、ラ・フランスを山形人は親しく呼びぬ
鎌倉の間口二間の珈琲屋　自家焙煎のコーヒーうまし
物価高知らぬＡＩのうのうと旬は安いと断定するな
デフリンピック応援しようと思へどもリアルタイムの放映がない

母の命日

能勢玉枝　東京

渋抜きをしてくれし柿のほのかなる甘さあぢはふ姉おもひつつ
褒められもせず罰もなきひと世なりし母の命日けふ文化の日
晩年の母がぽつりと褒めくれしわれの歯並び、あなたのお蔭
少しづつ遅れが生ず足並みを揃へることが好きなりし足
つかの間の季（とき）を楽しむ〈狩り〉ありてあきつしま今もみぢの季節
ひと気なき園にひたすらひびきをり三連水車の立てる旋律

見てられぬ

黒石孝　新潟

大根を表札代はりに干す家の疎らとなりぬ熊の出る村
獣らの残しし山の柴栗を採り来て甘きジャムにして食ふ
ぬばたまの男政治に担がれて〈さなえ首相〉が笑顔を作る
ガラスの崖登る女性の新首相ジェンダー平等を嫌ひ威を張る
答弁の作り笑ひが見てられぬ甲殻類的老人となる
くたくたに喋り疲れて皺みたるセーターに包みひと日を畳む

ラ・フランス

森田則子　三重

色みゆくラ・フランスの吐く息を居士と大姉が真夜に聞きゐむ
しもぶくれのラ・フランス手に「梨王」と呼ばれし王を親しくおもふ
ごろごろと転んでばかりラ・フランスは正座が苦手なフランス生まれ
さくさくの二十世紀もとろとろのラ・フランスも秋の気にほふ
歌を詠まうと誘ひしことを唯一の夫孝行とうぬぼれてゐる
皮膚や汗、毛髪ひとが日々落とすＤＮＡに汚れゆく街

ノーベル賞

森田治生　三重

ノーベルは賞にカラシニコフは銃にその名を残す死を踏み台に
戦争で築きし財を基にしてノーベル賞は作り出されき
力による平和は真の平和ならずさはさりながら平和は平和
みづからに賞をよこせといふ人を推薦しますといふ人がゐる
夕闇の公園走る光りの輪ケルベロスでもゐるかと思ふ
うるほひのなくなるよはひ冬が来てうまくいかないスマホのスワイプ

大阪のひと

礒川朋美　大阪

「大阪」の駅には「梅田」の字があふれ大阪駅ってどこなんですか
阪神の地下で三時にラーメンを立ち食ふ美女にまづはたぢろぐ
イカ焼きのデラバンどこにイカがゐてデラックスなのまあ食うてみい
二十年経てば梅田のダンジョンも攻略法が見えてくるなり
大阪の喫茶店ではワッフルが一番人気　まあしらんけど
ダンジョンの隅の寿司屋で一人飲むわれはいつから大阪のひと

水影

久保田智栄子　広島

翡翠色のかたき実割ればみづみづと種も果肉も皓(しろ)きパパイヤ
恵谷さんに教へてもらつた茄子ピザを五分で作り夫送り出す
消しゴムのかすをあつめて掌に載せぬ鉛筆愛する君に倣ひて
置かれある鉄路の小石つるつるとたまごのやうで拾ひたくなる
おとなしく並んで待つ間に流れをり三原駅ホーム〈かもめの水兵さん〉
水影は清らなるかな作詞家の三原市出身武内俊子

フジバカマと蝶

鮎川　清山口

地味系の花を挿頭(かざ)してフジバカマ渡りの蝶の訪れを待つ
待ち兼ねしアサギマダラの姿あり去年と同じく十月二十日
輪舞する乙女さながら移りゆく蝶の動きにハーモニーあり
見る吾を意識せるごとその羽根を開きては閉づ六羽の蝶は
子や孫にメールを送る今年またアサギマダラも吾も無事ぞと
施設なる妻の育てしフジバカマ今年も蝶と画像で見せむ

魚屋閉店

木戸孝子　福岡

いつときのにぎはひ了へて金木犀また暗緑の沈黙に入る
ガラス戸に貼紙　いやな予感当たりなじみの魚屋閉店告知
鯛一尾手早くさばき女房が銭を受けとる昭和そのまま
あかるいと人に言はれて私はあわてて笑顔のペルソナをつく
死にさうな星を呑むさま映像に観てより夜空の銀河が怖い
貸した本友からその友と回りゆき　本は貸したら戻つて来ない

楽器

北　祐二郎　佐賀

制服の少女は十字架背負ふごとチェロケース背に坂の街ゆく
誰の髭がモデルだらうかヴィオロンの調べを韻かせるf字孔
嫉妬する楽器と誰かが言つてゐた抱きしめるごと吹くユーフォニアム
駅ピアノの鍵盤の上でひかりたり君の真赤なマニキュアの指
マーティンの音色を思ひ爪弾けりキャッツアイの二万円のギター
木製のちさき兎の鼓笛隊もみぢ敷かれしショーウィンドウに

つひに来ました

立石千代女　長崎

踏み台を持ち来て二歳が「おてつらい」レタスを千切るじやがいも潰す
「警視庁捜査二課の～」と私にもつひに来ました偽電話詐欺
用が済み初めての町を散策す半日だけのわがひとり旅
丈ひくく揃ひて咲けるあわだちさう宝原(ほうばる)園地のひと隅を占む
時化の日の沖に向かひていくたびも何やら叫(おら)ぶ小柄な女性
法要に集へるうからリビングでそれいけわあわあドジャース観戦